

1 学校教育目標

人間尊重の精神を基調に、自他の生命を尊び、豊かな知性と感性を備えるとともに、国際感覚をもった心身ともにたくましい、人間性豊かな児童の育成を目指し、次の目標を設定する。 ○ よく考え がんばる子 ○ 明るく思いやりのある子 ○ 強い体で 元気な子

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

| | |
|---------|---|
| ○学校像 | 「子ども・教師・保護者・地域が共に学び合い育ち合う学校」 ○子どもにとって学びがいのある学校 ○教師にとって働きがいのある学校 ○保護者・地域にとって誇りにできる学校 |
| ○児童・生徒像 | ○自分の成長を実感し、生涯学び続けようとする子ども ○自他の違いを多様性として認め、それを「よさ」として活かしていこうとする子ども ○人や社会のために役立つ働きをし、自らよりよい関係性や社会を作ろうとする子ども |
| ○教師像 | ○授業の質を高め、常に学び続ける教師。 ○子どもの「よさ」を積極的に見出し伸ばしていこうとする教師。 ○保護者・地域と共によりよい学校づくりを目指す教師。 |

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

- ・「足立区コミュニティスクール」として5年目を迎えた。学校・保護者・地域が相互に協力し合い児童の育成を進める「地域協働」を主な経営理念において取り組んでいる。ここ数年は新型コロナウイルス感染症への対策のため、学校行事等を行うことができなかったが、令和4年度には対策を講じた上で、宿泊を伴う行事や校外での行事の他、保護者や地域の皆様へ授業を公開した。また地域と連携した「古千谷フェスタ」を実施し「地域協働の学校」としての意義の一端を感じることができた。
- ・各学級には、支援を必要とする児童が増加している状況で、学級経営が困難になってきている。教職員の特別支援教育への指導力向上だけでなく、保護者や地域の皆様の理解と協力の必要性が増してきている。

<授業改善・学力向上>

- ・学力調査の通過率が76.7%で、目標とする80%を下回った。既習事項の定着や文章の読み取りに課題がある。今後は、指導方法を工夫するだけでなく、ねらいの達成について確認しながら、個別に応じた支援も行っていく。また、AIドリルなども適宜活用し、基礎基本となる力の定着を図る。家庭学習は毎日行うことができている児童が多いが、取り組めていない児童が30%程度いる。指導内容の定着に向けて、保護者との連携強化が必要。
- ・日常的な読書の習慣化を目指して朝読書および「読書マラソン」に取り組んだ。「100日完読」した児童は███%程度。学年によっては██%達成。
- ・教師の授業力の向上に向け、校内OJT研修を10回行った。内容は、理科における実験器具の扱い方や実技研修、児童の見取り等で、今後は研修内容をさらに充実させ、レベルを高めていく。その他教科研究を行う。

<小中連携教育の推進>

- ・各教科部会での指導案の作成、検討、授業の実施、協議について連携校で1回ずつ計4回実施した。児童生徒の規律等についても連携を進めていく。

<豊かな心の育成>

- ・縦割り班活動を計画的に年間10回実施した。上学年が下学年を思いやり児童の手本となっている。本校の伝統として継続して行っていく。
- ・校内にある特別支援学級との交流を含め、お互いの良さや違いを認め合う活動を通し、自尊感情や自己有用感の向上に向けて取り組む。
- ・区調査での自己肯定感はどの学年も区の平均を下回っている。できたことを認め励ましながら、自信を持たせ、学習用に活かせるよう学校全体で取り組んでいく。

<体力向上>

- ・縦割り班活動を活用し、様々な動きを取り入れた「こちランド」を計画的に実施し、運動に親しみ体力の向上を図っている。
- ・なわとび週間や持久走週間の設定でも運動への意識向上が図れた。「たくさん運動したり遊んだりして体を動かしている」と答えた児童は79%であった。

4 重点的な取組事項

| | 内 容 | 実施期間（年度） R:令和 | | | | |
|---|---------------|---------------|----|----|----|----|
| | | R3 | R4 | R5 | R6 | R7 |
| 1 | 学力向上アクションプラン | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 2 | 健全育成（豊かな心の育成） | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 3 | 体力向上 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 4 | 小中連携、幼保小連携 | | ○ | | | |

5 令和5年度の重点目標

| 重点的な取組事項－1 | | 学力向上アクションプラン | | | |
|-------------------|-----------------|---|--|--|-------------|
| A 今年度の成果目標 | 達成基準 (目標通過率) | 実施結果 (通過率結果) | コメント・課題 | | 達成度 ◎○△● |
| 確かな基礎学力の定着と活用力の向上 | 学校平均通過率 80%を超える | 全校平均2科 (72.6%) 国語 (74.5%) 算数 (70.7%) | 学年による較差もあるが基本的事項の定着に向けた授業及び補充体制に再考が必要。 | | ● |
| B 目標実現に向けた取組み | | | | | |

| 新・継 | アクションプラン | 対象学年 実施教科 | 頻度・ 実施時期 | 具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように) | 達成確認 方法 | 達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度) | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 ◎○△● |
|---------|-----------------------|-----------------|-----------------|--|---|--------------------------------------|---|--|-------------|
| 1 新規 | 学習環境 の調整 | 全学年 | 年間 | ・全教職員が授業規律を校 内で統一する ・古千谷の決まりの作成 | 学校評価アン ケート | アンケート結 果80%以上 の肯定的意見 | 授業規律の確立につ いては成果を残しつ つある。81.3% | 具体的な学習指導内 容に切り替える。 | ○ |
| 2 新規 | 座席表の 活用 | 全学年 算数 | 1単元に 1回以上 | ・担当教員が座席表にねら いを達成した児童をチェ ックする。未達成児童に 「たしかめ」の間で個別指 導を実施する。 | 各学年の取組 を学力向上委 員が確認 単元終了時の ワークテスト で確認 | Cチェック児 童の意欲を向 上させる | 問題を抱える児童の 重点指導への意識は あるが、ポートフォ リオ化など具体的対 策がなかった。 | 基本的な対応を確立 させて、次のステッ プに取り組む。 | △ |
| 3 継続 | 読書の推 進 | 全学年 | 朝読書、 読書週間 | ・各担任、図書担当・図書 委員会を中心とする ・想像的な思考力の育成 ・図書支援員と連携し、学 年課題図書ほか、教科書に 出てくる図書 | 読書マラソン カード | 図書館稼働率 は1日当たり 80%を超えて いる。 | 読書マラソン達成率 88%。学校図書館 の特質を生かしてい たとは言いがたい。 | 学校図書館の存在意 義や利用について、 図書支援員と連携 しながら、既成概念 を払拭したい。 | △ |
| 4 継続 | 放課後補 習教室 | 全学年 国語 算数 | 月末の水 曜 | ・各担任他、全教員 ・個々の課題に応じた個別 学習 ・1年生はMIMU | 確認テストの 実施 | 1月までの定着 度テストで目 標値通過児童 90%以上 | 古千谷塾と銘打ちな がらも効果的な補充 体制には及ばない。 | 昼休みの清掃の時間 を4日から2日に削 減し、タブレット学 習時間に充当する。 | △ |
| 5 継続 | 家庭学習 の取組 | 全学年 | 毎日 | ・各担任 ・指導内容の定着と予習を 通し、家庭学習を習慣化 | 宿題や自主学 習の提出 | 年間を通して 70%以上 | タブレット・AIド リルの活用を生かせ なかった。 | 毎日のタブレット持 ち帰りによる、家庭 学習定着を目指す。 | △ |
| 6 継続 | ICTの活用 | 全学年 | 毎週 週3回以 上 | ・毎週金曜のAIドリル ・家庭でのキュビナの取組 | Chromebookの 活用状況 | 取り組み問題 数1000以上 | キュビナ利用状況は 全校的に芳しくなく 学級間格差もある。 | 指導方法の全体研修 等を通して実践化す る。 | △ |
| 7 継続 | 授業改善 (教師指 導力向上) | 全教員 | 年間6回 | ・各学年の授業研究 ・授業に向け分科会を実施 | 年6回の研究 授業 | 研究授業後の 効果検証 | 公式校内研6回 自主研・非公式研修 会を計20回程度実施 | 生活指導力と学習指 導力の両面を備えた バランス感覚のある 教員体制を目指す。 | ○ |

| 重点的な取組事項－２ | | 豊かな心の育成 | | | |
|-------------------------|--------------------|---|---|--|-----|
| A 今年度の成果目標 | | 達成基準 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
| 自尊感情・自己有用感の向上 | | 意識調査結果 70%以上 | 「秩序の維持」81.3%・「人権の尊重」89.1%・「思いやりの規範意識」87.9%の肯定的見方があった。 | 8割以上の支持に感謝し、2割の問題点へ真摯に取り組む。 | ○ |
| B 目標実現に向けた取組み | | | | | |
| 項目 | 達成基準 | 具体的な方策 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
| 自尊感情・自己有用感の向上 | 児童自己評価で70%以上 | <ul style="list-style-type: none"> ・QUによる分析、評価を元にした支援 ・全校でSSTを実施 | 安心して生活できる学校環境づくりに取り組んだが、学年・学級間における格差が生じた。自らを過小評価しがちな児童も目立った。 | 自己肯定感と自己中心的思考の違いを明確に指導する。 | △ |
| 自他共に大切にする心の育成（差別や偏見の防止） | 児童自己評価で70%以上 | <ul style="list-style-type: none"> ・毎月のいじめアンケート ・全員のSC面談 ・校長、生活指導担当の講話 ・人権週間での取組 ・道徳指導 | いじめに関しては、その発見と初期段階での対応に努め、人権感覚の育成を指導の中心とした。道徳授業は、学年によって指導方法が異なったが、児童も真面目に取り組んだ。 | 授業や生活を通して身に付けたものを実践力に変えていく指導や機会が必要と思われる。 | △ |
| 交流活動の推進 | 異学年等交流活動を年間10回以上実施 | <ul style="list-style-type: none"> ・縦割り班活動の実施 ・異学年同士の交流 ・特別支援学級と通常学級児童との交流 | 校内での縦割り異学年グループによる「なかよし班」の実施や幼保小交流を通して人との関るスキルを高め、年齢に応じた立場や責任感を身に付けていた。 | 交流活動の目的や目指す児童像を教員が共通認識をもって今後も指導にあたる。 | ○ |
| 「いのち」をテーマとした取組 | 各学年、年間1回以上 | <ul style="list-style-type: none"> ・道徳資料の活用 ・講師を招聘し、講話の実施 | 学校公開に合わせて、親子で参加する講演会も実施することができた。 | 外部人材活用を今後も行っていきたい。 | ○ |

| 重点的な取組事項－３ | | 体力向上 | | | |
|-------------|--|---|---|--------------------------------|-----|
| A 今年度の成果目標 | | 達成基準 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
| 健康で安全な生活の実践 | | <ul style="list-style-type: none"> ・体力向上の意識について、保護者評価や児童の評価で肯定的な評価が80%以上 | 学校評価内「体力向上や健康増進の活動」について88.2%の肯定的見方がされた。 | 運動好きな児童は多いが、反面健康維持や安全面への意識が薄い。 | △ |

| B 目標実現に向けた取組み | | | | | |
|---------------|-------------------------------|--|---|---|-----|
| 項目 | 達成基準 | 具体的な方策 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
| 日常的な体力向上 | ・児童の自己評価で「たくさん体を動かしている」80%以上。 | ・こぢりランドを年間25回実施 ・大縄、縄跳び週間の実施 ・「リングビー」の実施 | 学年を越えた人間関係が自然な形で日常化されている。その中で思いやりや敬意を互いに持っているようにも見える。 | 異年齢交流を通じた特活の見地での活動であるが、回数に一行が必要。 | ○ |
| 体育、保健学習の充実 | ・児童の授業についての評価で80%以上。 | ・年間指導計画に基づいた指導の実施。 ・保健指導年間計画に基づいた指導の実施。 | 学習指導要領に基づいた体育授業の基本に立ち返り、指導側からの自主的な意識改革が行われた。 | 児童の安全保護や授業力向上に向けて、教員自身のアップデートには今後も意識していきたい。 | ○ |

| | |
|-------------------|------------|
| 重点的な取組事項－4 | 小中連携、幼保小連携 |
|-------------------|------------|

| A 今年度の成果目標 | 達成基準 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
|----------------------|---|--|---|-----|
| 中学校および幼稚園・保育園との円滑な連携 | 小中連携で授業研究（3回）と情報交換会の実施 幼保小連携で情報交換会（2回）、児童と園児の交流の実施（連携園で2回） | 授業公開や協議会、給食や行事での交流など、コロナ禍後に初めて通常並みの活動が行えた。 | その学校に入学しない児童や園児にとっても未知の場所へのよいイメージを持たせる重要な取り組みである。 | ○ |

| |
|----------------------|
| B 目標実現に向けた取組み |
|----------------------|

| 項目 | 達成基準 | 具体的な方策 | 実施結果 | コメント・課題 | 達成度 |
|--------------|---------------------------------|--|--|--|-----|
| 教科指導を通して小中連携 | ・年間3回の授業実践。 ・講演会1回。 | ・生活指導を中心とした情報交換の実施。 ・授業公開による児童生徒理解。 ・教科部会毎の授業実践。 | ・研究授業に向けての指導案検討自体より、それらを通して小中間の教員の意思疎通が図れることに、連携本来の意味を感じ取れる教員が増えた。 | ・小中学校の各教員が相互にその立場を理解して認め合えることが重要で、そのためのリーダーが必要である。 | ○ |
| 幼保小連携 | ・職員交流を通じた園児児童理解。 ・園児児童の交流2回。 | ・園職員の小学校見学、小学校教員の園見学の実施。 ・園児を招聘して児童と交流実施。 | 1年生との交流給食を2つの幼稚園と実施することができた。同時に校内探検会や給食体験も行った。 | 児童の就学ギャップを軽減させるためにも貴重な機会であると考えられる。 | ○ |

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

<学力の定着と向上>

児童全体の学力という観点では、現在高い位置にあるとは言えない。しかし、それぞれの個性の違いにより理解習得の限界範囲も児童によって異なる。学校の平均点に具体的な児童はいない。まずは、学習指導要領で求められている基本的な履修事項を全児童が身に付けることを大目標と設定し、そこから個々の能力に応じた目標に向けて、児童が意欲的に取り組む学習環境を作る。

- ① 教員の指導力向上を目指し、全教職員が校内外の研修や研究に関り、常にアップデートを怠らない姿勢で職務に携わる。
- ② ICT機器の使用を学習教材の一つとして普遍（特別視のない定着）化させる。家庭内でも同様に毎日の家庭学習のツールとしてタブレットを使用する。
- ③ 学校の本分は授業という原則に則り、児童の学ぶ権利を阻害する事象に対しては教育の一環として厳しく対応をする。

<豊かな心の育成>

自らに甘く自分勝手に振る舞うことと取り違えることのない正しい自己肯定感を育むためには、他者との関りをもつ機会の多い学校の役割は大きい。同時に家庭での躾や教育力も大きく影響することが顕著である。そのためには、学校と家庭の共通理解と協力体制が必要不可欠である。学校においては、他者との関り（共同活動や意見交換、トラブルへの対処、共感、喜びなど）を通じた豊かな心を養う支援をおこなう。社会的な規範や公平性についても培っていく。

- ① 特別活動の計画的実施を通して、それぞれの場面で目指すことを児童が理解し、成就感や反省などの自己を振り返る場面を設定する。
- ② 道徳授業や意見交換（自らの考えを伝え、他者の思いを受け取る）が自然に行える児童の姿勢づくり、校風の確立を目指す。
- ③ 他者との関りや他者への思いやり、良識については全生活場面を通して高めていく。

<体力向上と健康への意識>

元来本校の生徒は、運動や外遊びの好きな児童が多い。ただし、自分中心の配慮に欠ける粗野な部分もあり、接触によるケガなども発生した。心の育成ともリンクするところであるが、スポーツに親しみ自らを高め、健康安全に配慮できる児童の育成も課題である。

- ② 危ないからやらない論理ではなく、スポーツや外遊びを奨励する、自ら危険の要因を作らない配慮と危険な場面からの回避能力を身に付けさせる。
- ② プロのアスリート（野球・バスケ・ボッチャ・縄跳び等）を招き本物を目にすることで自らも目標をもって取り組もうとする態度を培う。
- ③ 運動やスポーツを通して、ルールの遵守や自らの健康への配慮、他者の安全への気遣いなどを育む。

(2) 保護者や地域へのメッセージ その他（学校教育活動全般について）

令和5年度は、新型コロナウイルスの5類移行により様々な変化がありました。3年間中断していた各種行事も従来通りとまではいきませんが色々と再開される年でもありました。ご家庭の皆様には多くのご協力をいただき感謝申し上げます。ここで従来通りといかなかった理由は、大人社会では元に戻すと言っても、4年生以下の子供たちにとっては初めてのことも数多くありました。中学年以上になって初めて本格的に取り組むような行事に、昔はこうだったのだからと高いレベルを要求するのは子どもにとっては理不尽なこともあると判断した事案もありました。しかし、そこでとどまるのではなく、何事についてのレベルアップは必要なことと考えております。学習・行事なども日々向上を目指していきたいと考えております。そこでご家庭の皆様のご指導やお力添えは、学校にとってはとても大切なものです。今後ともご支援の程を何卒よろしくお願い致します。